

ケーキ職人現場の事例研究から現場参加と技能の関係を探る

How does a junior expert organize her participation in the cake-making expertise?

松熊 亮[†]
Ryo Matsukuma

[†] 首都大学東京大学院 人文科学研究科
Tokyo Metropolitan University, Graduate School of Humanities
matsukuma-ryo@ed.tmu.ac.jp

Abstract

We discuss the approach to study sociocultural experience. Two participants were a 3rd-year pastry chef and a 10th-year pastry chef at the same shop. We observed the making-cake scene of experts and inquired the awareness in practice. The analysis showed that the junior expert partially shared the attitude toward the practice, and this was regarded as important by the senior. The result suggests that these parallel attentions facilitate the junior expert's "everyday experiment".

Keywords — Sociocultural approach, Expertise, Everyday experiment, Spontaneous

1. 問題と目的

状況的学習[1]や日常的認知[2], 社会文化的アプローチ[3]などの研究群は学校教育的な「教える・教えられる」関係とは違った人間形成のあり方を描き出した。それはどちらかという生物制約に強く依存して生じてくる「成熟」の問題とも、ある行動の定着や問題解決をどういった介入で効率的に成立させるかという「学習」の問題とも異なった前提を提供してくれるものである。

社会文化的アプローチが再度着目したのは生活の中で自発的に働きかけ、それが状況に方向付けられることで、私たちが物事を学び適応していく自然な相互作用の過程である。より広義な人の変化を捉える言葉としての「発達」や先に述べた「教える・教えられる」の関係で生じる「学習」とも区別して、これをいったん主体の社会文化的経験のプロセスと呼ぶこととする。社会文化的経験のプロセスとはある状況に属する個人が、その生活の流れに身を置いて自ら試行錯誤しながら適応に至ろうとする過程である。

社会文化的アプローチにはこの社会文化的経験を切りとる観点が2つあると考えられる。1つは、ある文脈で結果的に生じる主体の認知や行動に着目して、生活状況に埋め込まれた参加主体を導く方向づけの仕組みを探るアプローチである。これは Rogoff(2003)や Cole(1996) [4]のアプローチであり、結果として生じる能力に対する文化的要因を明らかにすること、そのために文化的活動が何から成り立っているかを研究するものである。これらの研究は文化とは何かという問いや、どのように周囲の人間は個人の行動を方向付けていけばよいかという問いに答えるものである。

もう一方は適応に向けて試行錯誤する主体の記述を中心に、主体の試行錯誤を支える仕組みを探るアプローチである。これは個人が自ら考え取り組むことの意義や、個人の持つ自発性をどうすれば周囲は支えてゆけるかに答えようとするものである。筆者はこの観点に立って実践に身を置いた生活の中で変化する人間の姿を記述し、その経過のメカニズムを明らかにすることを目的とする。これを考える理論的手がかりは Lave & Wenger (1991)の正統的周辺参加論[5]および、福島(2010)の「日常の実験」[6]という概念にある。

正統的周辺参加論は徒弟制、つまり「教えない」実践共同体の中で参加者が労働の一部を担うことで共同体内に居場所を得て、実践活動を観察し、周辺の作業において試行錯誤することが許されていることを示した。また共同体の営みへのアクセスの保証によって、参加者には自分の経験すべき先が見えていることも重要であるとされている。

重要なのは実践共同体自体もまた何らかの制約を抱えているが、目標の見やすさなど、主体の試行錯誤を保証するための仕組みを自然な生活のなかで作っていることがあるという視点である。

福島(2010)は参加者にとって日常が単なる活動の反復ではなく、それがミクロであれ、なにがしかの錯誤や革新を含んでいるとした。その日常の中で行われる探索や試行錯誤のことを「日常の実験」として概念化している。つまり、私たちの生活はただの反復ではなく、文脈による誘導を受けながら、目の前の課題やより遠くの目標に向けて試行錯誤を行うことの連続なのである。福島はそういった日常の実験の場の空間を組織が備えていることの重要性を指摘した。

日常の実験に関する部分的証拠と研究方法論の示唆は、生態学的アプローチによるマイクロスリップ研究[7][8]に求めることができる。生態学的アプローチでは社会的要因や文化的要因についての検討を主にした文脈とか状況ではなく、より生物学的な視点から環境に対する生体の定位や行為ユニットの成り立ちを問題にしている。

生態学的アプローチの研究は運動制御や知覚の変化を捉える目的で主体の縦断的運動経過と環境の関係を記述している。これらはある特定の文脈変化で起こる主体の働きかけと自己形成への知覚運動的側面からの接近である。筆者はこれらの研究群の行った観察や実験の方法論を援用して、社会文化的状況での「日常の実験」現象にアプローチを試みよう、ケーキ職人の研究を行った[9]。

筆者はケーキ職人のスポンジ・クリーム・フルーツからデコレーション前のホールケーキをつくる土台作りの工程の一部であるナッペ作業を職業人と素人との横断的比較の中で記述することを試みた。ナッペとは積み上げたスポンジの表面にクリームを塗って、表面を整えることである。論文ではナッペ作業の組織化と初心者試行錯誤を取り上げることを中心に論じ、現場に参加することや職業人の試行錯誤には触れなかった。本発表では先行論文の協力者 P1 と P3(以下、本発表では P3 を先輩 A, P1 を後輩 B とする)を事例的に取り

上げ、現場での試行錯誤および参加プロセスへのアプローチを目的として、別次元による作業の再分析と言語報告の検討を行う。

店舗一事例の乏しいデータではあるが先行論文の作業比較を踏まえた上で、先輩後輩の差異と2者の言語報告および言語的やりとりを検討することから今後の研究においてどのような調査方法が可能であり、また動作だけでなく言語報告ややり取りの中からどのように現場への定位やそこにいたろうとする試行錯誤に迫っていけるかどうかの示唆を行いたいと思う。また同時にそれらの試行錯誤を支える社会文化的仕組みや関係的な様相について考察ができればと考えている。

2. 協力者および現場についての情報

先輩 A と後輩 B はともに同じケーキ屋に所属する 10 年目の職人(男性、作業観察時は 9 年目)と参加 3 年目の職人(女性)である。ともに職業に就く前に専門学校にて焼き菓子に関する知識や作業に関する学習を行った。先輩 A は別の店舗での仕事を経て現在の現場に移ってきていた。後輩 B にとって現在の店舗は初めての現場で、先輩 A よりも後に現場参入した。先輩 A は 6 人の職人が焼き菓子の生産を回している現場で同じ担当グループに配属された後輩 B の監督を行う立場にあった。

後輩 B は観察および聞き取りを行った時点で、観察の対象としたケーキ土台作りを店でのポジションとして任されて約半年経ったところであった。松熊(2015)で行ったケーキ土台作りの部分的工程であるナッペ作業の時間や工程の検討では後輩 B と 7 年以上の経験を積んだ先輩 A およびもう一人の職人と比べて、分析上大きな差異は見受けられなかった。

調査したケーキ屋の職人たちは現場に参加してからショートニング(油の一種)などを用いて、ナッペの練習を行っている。そして時間をかけてもよい余裕のある仕事の時に実際に商品の土台作りを試しに任されたりする過程を経て、正式に毎朝 30 台ほどのケーキの土台をつくるポジションを任されるようになるという。

土台作りのポジションは用意された材料から、デコレーション前のケーキをつくる工程を担う。開店前に必要な数のケーキをつくって並べる上では速度も重要であり、任されて最初のうちは早めに出勤して作業に取り掛かることや、どうしても間に合わない判断した時はより経験を積んだ職人に変わってもらうこともあるという。先輩Aによれば後輩Bに土台作りのポジションを任せることは、Aと全体の監督をするシェフとの相談で決めたそうである。

3. データの収集方法

先輩Aおよび後輩Bそれぞれに、普段の現場、使っている道具とやり方での土台作りを依頼し作業の様子を正面からビデオで記録した。撮影を行ったのは両者とも店の閉店後の同じ時間帯で、周囲では片づけや帰り支度をしている時間であった。現場の方々には作業撮影中に作業者に話しかけて作業を中断させてしまったり、ビデオにうつりこむことがないようにしてもらった。

後輩Bには作業撮影後、先輩Aの立会いの下で後輩B自身の作業の振り返りや自身の現在の仕事に対する意識について聞き取りを50分程度行い、音声記録した。先輩Aにはできるだけ後輩Bが話すときにできるだけ報告を遮らないようにだけ依頼した。この聞き取りの目的は以前とは違った役割で仕事をする中で芽生えてきた意識や、ナッペへのこだわり、現在自身で課題となっていることを聞き取ることであった。後輩Bが自由に話し、控えている先輩Aに質疑応答をするやりとりが生じて、観察者は遮らないようにした。

また後輩Bの観察後に先輩A個人に1時間程度の聞き取りを依頼した。そこではそれまでのデータ分析において必要になった確認事項の確認と仕事へのこだわり、自身が仕事で現在課題に感じていること、後輩Bに教える上での意識や、そのように感じるに至った来歴の振り返りを求めた。

本発表では松熊(2015)で報告したデータを踏まえつつ、ビデオ記録した作業についての別観点からの分析と、2回の異なった場面で行った聞き取

りから得られたそれぞれの発話および2者の言語的やりとりについて検討を行った。本稿では概要のみを示す。

3. 結果

表1 見いだされた結果の概要

	先輩A	後輩B
作業への余裕	メリハリある作業への集中の様子	照れ笑いなど、集中出来ない様子
個別発話	教示への消極性 実践態度への信頼	方法の追求や 仕事意識の変化
やりとり	技術的方法でのわかりあえなさ 実践態度における同意	

作業への余裕の持ち方の観察

行動のコーディングはディケイエイチ社の行動コーディングシステム(Beco)を用いて行った。

松熊(2015)ではケーキの土台作りのうち、より限定されたナッペ作業だけを対象とし、作業の工程上の違いや作業時間の違いを見た。今回取り上げる2人はナッペ作業に限定した分析では、作業姿勢の安定度、ケーキを操作するのに使った実質のナッペ作業時間、そのほかの作業工程および作業動作回数においても非常に近似した様相が観察されていた。この近似は初学者および異なった職種との比較を行った先行論文ではより際立っており、後輩Bが少なくともナッペ作業の工程と時間に限定すれば、先輩Aらと同じ「職人」としてグルーピングして問題がないと考えられた。

先行論文の結果を踏まえて今回は2人の土台作りの作業工程様相ではなく、作業に対する余裕を取り上げることとした。分析対象場面は、スポンジを3枚におろし始める土台作り作業の開始時点から、回転台上でケーキの土台作りを終えた時点までとし、作業は「素手での作業」、「片手道具作業」、「両手道具作業」に分類した。そのうえで作業中にみられる両者の行動的な差異を検討した結

果、脱作業的な視線や表情の変化において異なった質が抽出された。

プロとしての態度を媒介にしたやりとり

先輩A立会いのもと行われた先輩Bへの聞き取りでは、ケーキの技術的な話についてBがAのアドバイスやフォローに対して納得しない場面が多い印象があった。しかし一方で、仕事をする上で態度に関しては2人の間で“プロ”という言葉で共有されている意識があるかのようなやりとりが2回生じた。

一つはBが「どうすれば〇〇できるか」と食い下がる場面でAが「それをやるのがプロでしょ」と言い、対して食い下がっていたBが「そうか」と納得してしまうやりとりである。もう一つは聞き取りを行っている筆者に対して、Bが自身の客を意識した意識に関して語ろうとするのをAが「プロとしての…でしょ」と横から代弁する形でフォローするやりとりである。

すなわち仕事の時間的制約や前提知識など具体的なこと以外あまりお互いが同意しない談話において、この“プロ”という言葉に媒介された共同体の目的意識への同意を示唆するやりとりが自然的に生じていたといえる。

後輩Bの報告：成長への試行錯誤

先輩Aへの質問やどうやったらできるだろうというつぶやきのような「方法の追求」、他店や先輩のケーキと自らの「出来の比較」など具体的技術に対する意識が報告された。一方で、現在のポジションについて客を意識して仕事するようになった「仕事意識の変化」も報告された。

先輩Aの報告：尊重と信頼の意識

先輩Aへの聞き取りの上では、工作上必要であるから「教えちゃうんです」といった「教示への消極性」に関する発話が見られた。また仕事への責任感や後輩Bの仕事の様子への言及において「実践態度への信頼」の重要性を意識しているような発話も見られた。

4. 結果の考察

先行論文では同じグループとしてまとめていた3年目と9年目の職人であったが、別角度からの行動分析や後輩Bへの聞き取りを行うことにより、ナップ工程だけではみることのできなかった実践への取り組みの違いが示唆された。また言語的やりとりや先輩Aへの聞き取りからは「プロ」という言葉を中心にしたやりとりや仕事の責任感に関する発話が見いだされた。これらは後輩Bが社会文化的環境の実践のあり方やゴールを見つめて、それにそっていくことが、単に新規参加者の学習ゴールとしての機能にとどまらないことを示唆していると考えられる。

本検討事例はあくまで一事例であり、ここで示唆されたことはデータとしては弱く、一般性を問うこともできない。しかしながら、先行論文で示した作業動作へのアプローチ以外に、日常の実験、すなわち社会文化的経験の経過で生じる試行錯誤をとらえる手がかりを考えるための一つの事例にはなりえるものと考えられる。

また一事例ではあるが教えるよりもむしろ自ら学ぶことをよしとする実践において葛藤する先輩・後輩関係の記述は、実践における先輩のあり方について仮説を生成する手がかりとなる可能性がある。ポスター発表では先行論文と本事例の記述データをもとに、今後の研究の展望についてより考察を行いたいと考えている。

参考文献

- [1] 上野直樹. (1995). “生態学的なニッチとしての状況” 浜田寿美男・無籐隆・石田純一・松沢哲郎 (編). 別冊発達 10: 発達論の現在, pp.115-135. 京都: ミネルヴァ書房.
- [2] Lave, J. (1988). *Cognition in Practice: Mind, mathematics, and culture in everyday life*. Cambridge: Cambridge University Press. (無籐隆・山下清美・中野茂・中村美代子 訳 (1995). 日常生活の認知行動: ひとは日常生活でどう計算し, 実践するか. 東京: 新曜社.)
- [3] Rogoff, B. (2003). *The cultural nature of*

human development. New York: Oxford University Press. (當眞 千賀子 訳(2006). 文化的営みとしての発達: 個人, 世代, コミュニティ. 東京: 新曜社.)

- [4] Cole, M.(1996). *Cultural Psychology: A Once and Future Discipline*. Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press. (天野 清 訳(2002). 文化心理学: 発達・認知・活動への文化・歴史的アプローチ. 東京: 新曜社.)
- [5] Lave, J. and Wenger, E.(1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge: Cambridge University Press. (佐伯 胖 訳(1993). 状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加. 東京: 産業図書.)
- [6] 福島真人.(2010). 学習の生態学: リスク・実験・高信頼性. 東京: 東京大学出版.
- [7] 鈴木健太郎.(2001). “行為の推移に存在する淀み” 佐々木正人・三嶋博之 (編). アフォーダンスと行為, pp.47- 84. 東京: 金子書房.
- [8] 佐々木 正人.(2005). ダーウィンの方法: 運動からアフォーダンスへ. 東京: 岩波書店.
- [9] 松熊亮. (2015). “ケーキ作成の自然的観察による技能とその発達の検討” 認知科学, Vol.22, No.1, pp.126-137.